

第5章

総合的な学習の時間

- 第1節 学習内容
- 第2節 標準時数についての意識
(諸田 裕子)

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

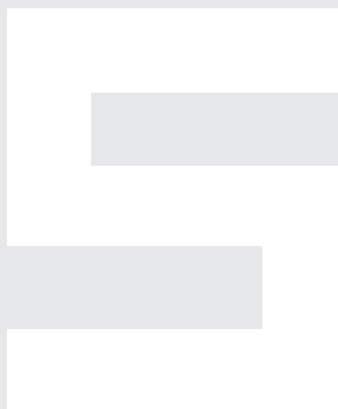
第8章

第9章

第10章

第11章

資料編



第1節

学習内容

小・中学校ともに、「総合的な学習の時間」の内容として、①「将来の進路や職業などの指導」②「国際理解や英語にかかわる学習」③「学校行事やその事前事後の学習指導」④「教科学習の補充や補習」が02年調査より増加。また、小学校では、「国際理解や英語にかかわる学習」「地域にかかわる学習」や「情報（コンピュータなど）にかかわる学習」が8割超、中学校では、「将来の進路や職業などの指導」「地域にかかわる学習」が8割前後を示している。【Q7-A(教員)】

1) 「総合的な学習の時間」をめぐる近年の議論

「ゆとり教育」の象徴として2002年度に導入された「総合的な学習の時間」は、その後の「学力低下」問題や関連して主張された「ゆとり教育」批判を経た2007年、学校現場でどのように実施されているのだろうか。奇しくも、今回の調査票配布の時期に、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会での議論を通じて「総合的な学習の時間」の是非が注目を浴びることとなった。部会資料によれば、「総合的な学習の時間」は、「体験的な学習に取り組むことや各教科等で身に付けた知識・技能を総合化し、課題解決能力を育成することは今後とも重要」であり、「一定の授業時数を確保することが適当」としながらも、他方で、「教科の授業時数の充実を求める声強いこと」「これまで『総合的な学習の時間』で行われることが期待されていた教科の知識を活用して考える力を育成する指導は各教科の中で充実する検討がなされていること」「英語活動を行うための時間を別途確保する必要があること」といった学校現場からの声を根拠に「各学年において35単位時間（週1コマ相当）程度縮減することが必要」という議論が展開されたことが確認できる（文部科学省HPより、

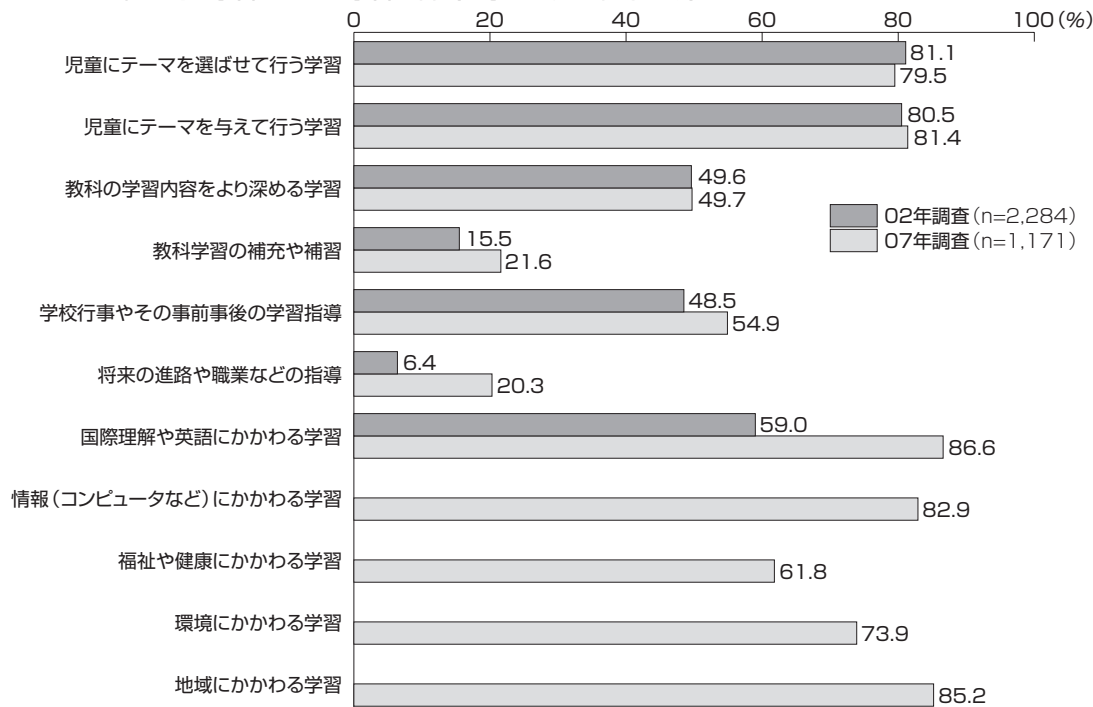
第4期第7回教育課程部会、2007年8月30日開催）。

2) 「総合的な学習の時間」の内容

まず、「総合的な学習の時間」を担当しているかどうかについてみると、「担当している」と回答した割合は小学校62.6%、中学校73.0%となっている（巻末の基礎集計表参照）。また、「担当している」と回答した教員に限定して、「総合的な学習の時間」の内容をたずねた。「あなたが担当している『総合的な学習の時間』では次のような学習をしていますか」という設問文に続けて、11項目を列挙しそれぞれについて回答してもらった。

図5-1-1～2からは、小・中学校ともに、①「将来の進路や職業などの指導」②「国際理解や英語にかかわる学習」③「学校行事やその事前事後の学習指導」④「教科学習の補充や補習」が02年調査より増加していることを確認できる。また、今回調査に限ってしてみると、小学校では、「国際理解や英語にかかわる学習」「地域にかかわる学習」や「情報（コンピュータなど）にかかわる学習」「児童にテーマを与えて行う学習」が8割超となっている。中学校では、「将来

図5-1-1 総合的な学習の時間 学習内容（小学校教員／経年比較）



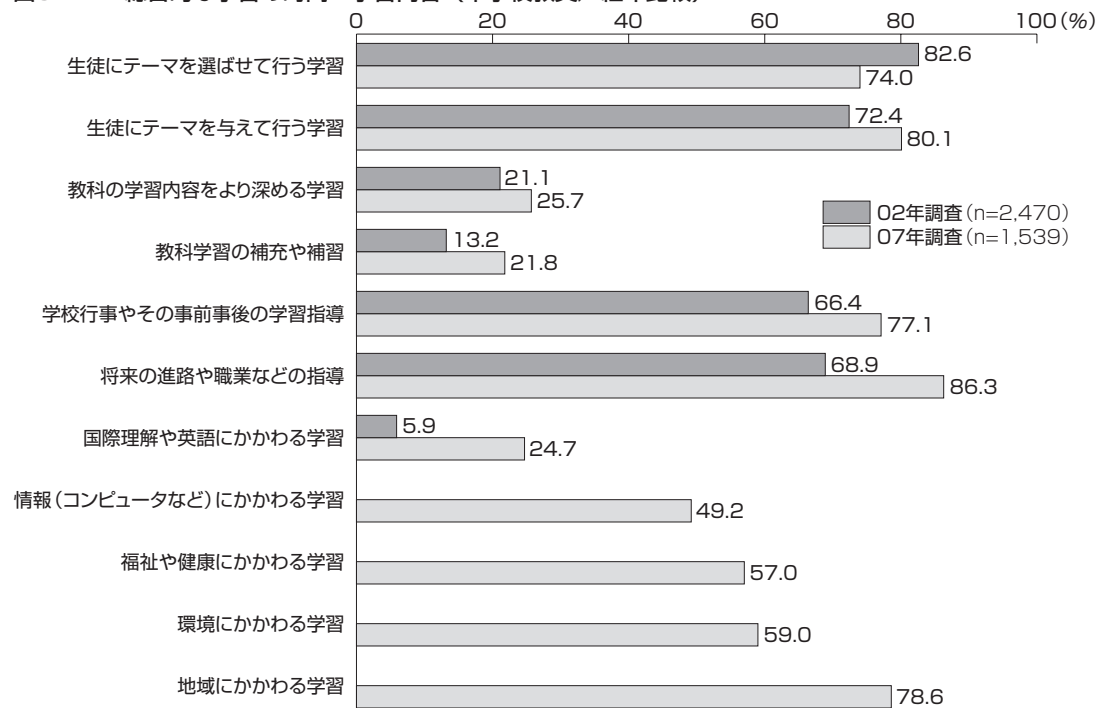
注1) 「総合的な学習の時間」を「担当している」と回答した教員のみ対象。

注2) 数値は、「よくしている」+「ときどきしている」の%。

注3) 「福祉や健康にかかわる学習」「環境にかかわる学習」「地域にかかわる学習」は、07年調査でのみとずねている。

なお、「情報(コンピュータなど)にかかわる学習」は02年調査ととずね方が異なるため、07年調査の数値のみ載せている。

図5-1-2 総合的な学習の時間 学習内容（中学校教員／経年比較）



注1) 「総合的な学習の時間」を「担当している」と回答した教員のみ対象。

注2) 数値は、「よくしている」+「ときどきしている」の%。

注3) 「福祉や健康にかかわる学習」「環境にかかわる学習」「地域にかかわる学習」は、07年調査でのみとずねている。

なお、「情報(コンピュータなど)にかかわる学習」は02年調査ととずね方が異なるため、07年調査の数値のみ載せている。

の進路や職業などの指導」「生徒にテーマを与えて行う学習」「地域にかかわる学習」が8割前後を示している。具体的な授業場面をふまえて検討すべきことではあるが、これらの回答結果からは、「総合的な学習の時間」が当初目的としていた「知識・技能の総合化」や「課題解決能力の育成」のためだけではない形で機能している可能性（あるいは、当初の目的以上の機能を担わざるを得ない学校の現状）が指摘できる。

3) 年間授業時数の設定（学校調査より）

ここで、学校調査の結果から年間授業時数をみると、標準時数を中心に時数を予定していた02年調査結果と異なり、いろいろな時数パターンへ分岐していることがわかる（図5-1-3～4）。これは、導入当初から時間が経過し、学校ごとの実情に応じた実施計画を作成し始めたことを表している側面もあるのではないだろうか。

図5-1-3 総合的な学習の時間 年間授業時数（小学校／経年比較）

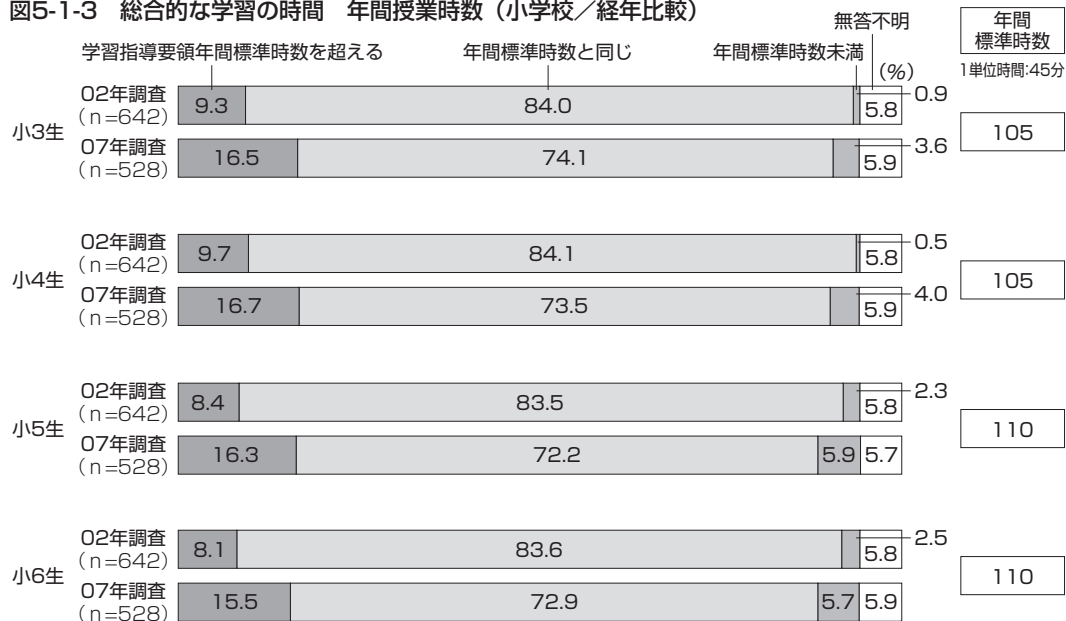
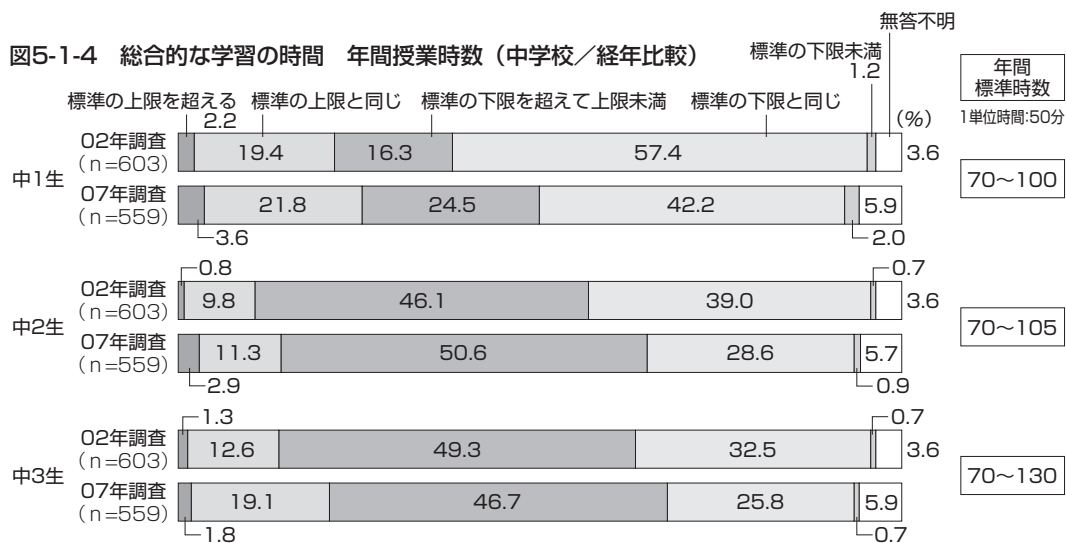


図5-1-4 総合的な学習の時間 年間授業時数（中学校／経年比較）



第2節

標準時数についての意識

「総合的な学習の時間」の標準時数について、「時数を削減したほうがよい」および「なくしてもよい」という反対意見が「現在より時数を増やしたほうがよい」および「時数は現状を維持したほうがよい」という賛成意見を上回っている。また、小学校よりも中学校において、反対意見をもつ教員が多いことも02年調査と同様の傾向である。

【Q7-B(教員)】

1) 「総合的な学習の時間」の標準時数に対する意見

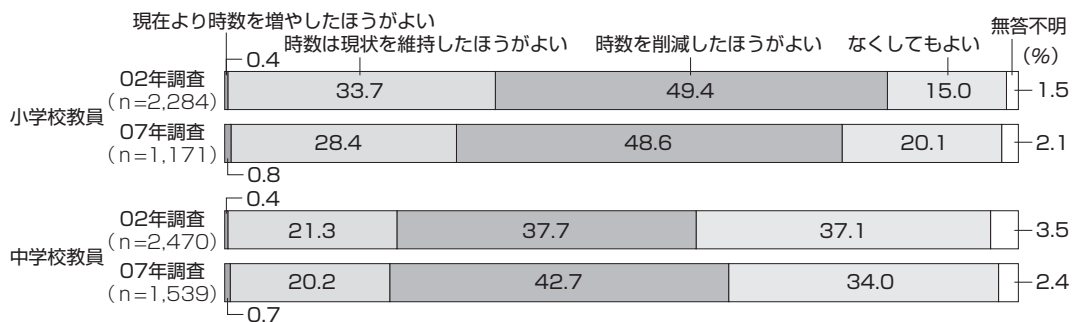
小・中学校の教員に「総合的な学習の時間」の標準時数についてどのように考えているかをたずねたところ、02年調査からの大きな数値の変化は確認できない（ただし、02年調査は、学校管理職と一般教員にそれぞれたずねている。今回は一般教員のみ対象。比較は一般教員に限定）。図5-2-1によれば、「時数を削減したほうがよい」+「なくしてもよい」を反対意見ととらえると、02年調査同様に、賛成<反対の傾向を示している。また、小学校よりも中学校において、反対意見をもつ教員が多いことも02年調査と同様の傾向である。

2) 「総合的な学習の時間」の指導が得意かどうかと標準時数に対する意見の関係(小学校教員のみ)

今回の調査では、小学校教員のみだが、「総合的な学習の時間」を指導することが得意かどうかについてもたずねている（p.122、9章1節参

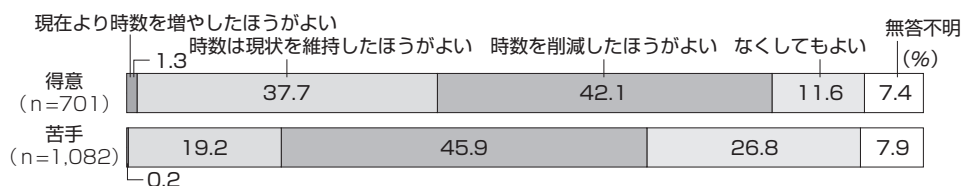
照）。ちなみに、「得意」および「どちらかという」と得意」と回答したのは、約4割（37.5%）の教員であった。それらの結果と当該授業時数についての意見の関連をみてみたところ、図5-2-2のように「得意」（「得意」+「どちらかという」と得意）なほど「時数は現状を維持したほうがよい」と回答する割合が高く、「苦手」（「どちらかという」と苦手）+「苦手」なほど「なくしてもよい」と回答する割合が高い。ただし、得意か苦手かにかかわらず、「現在より時数を増やしたほうがよい」は1%前後を示し、「時数を削減したほうがよい」はもっとも高い数値を示している。「総合的な学習の時間」が「得意」だと考えている教員であっても、「現在より時数を増やしたほうがよい」とはほとんど判断していない。これらの調査結果は、①「総合的な学習の時間」それ自体が教育課程としてもっているむずかしさ(内在的要因)と、②学校教育への過剰かつ多様な期待と要求(外在的要因)をその背景として検討する必要がある。

図5-2-1 総合的な学習の時間 標準時数についての意見（小・中学校教員／経年比較）



注) 07年調査ではすべての教員にたずねているが、02年調査に合わせて、「総合的な学習の時間」を「担当している」と回答した教員のみを母数として数値を算出した。

図5-2-2 総合的な学習の時間 標準時数についての意見（小学校教員／指導の得意・苦手別）



注) 「総合的な学習の時間」について指導することが得意かどうかをたずねた設問で、「得意」は「得意」「どちらかという得意」と回答した教員、「苦手」は「苦手」「どちらかという苦手」と回答した教員。